

# 両親の不和が子の心理的発達に及ぼす影響 —青年女子の場合—

## その1. 不和への介入度と心理的危機との関係を中心に

萩原英敏

(2003年9月29日受理)

【キーワード】 両親の不和, 介入, 青年女子, 内向性問題, アダプテーション

### 要約

両親の不和など、家庭内の問題が青年期の女性に、どのような影響を及ぼすかを見る為、某女子大216名を対象として、「家庭の環境の内容」「両親の争いの時の対処の仕方」「青年時期のアダプテーション」を尋ねる42項目からなるアンケートを実施した。その結果次の様な事が明らかになった。

1. 家庭の環境の内容の項目から4因子、両親の争いの時の対処の仕方の項目から3因子、アダプテーションの項目から5因子が見出された。
2. 家庭の環境の内容とアダプテーションの関連をみると、育った家族の関係が対立や不仲であったり、両親がいそがしかったりしていたら、青年期になっても、対人関係など内向性問題にマイナスの影響を受けていた。
3. 対処の仕方とアダプテーションの関連をみると、内面的思いや感じで困惑した場合、どんな行動を起こそうと、青年期になって、対人関係など内向性問題にマイナスの影響を受けていた。そして不和の状態に対して、それをどう認知するかが、後のアダプテーションに関連する事がわかった。

### 1. はじめに

今日の青年女子(某女子大生を1つのモデルとして考えた場合)は、以前に比べて心理的(精神的)問題を持っている様に思われる。それは学生との個別相談の中で、小中高校生の時に、ひどいじめにあったり、不登校や神経性食欲不振症になっていたなど話をする学生が少なくない。また入学後も一部の学生では過去のものを引きずっており、朝起きられず遅刻したり、登校しなかったりして講義をまともに受けられない学

生が増加している。また出席しても何か不安なのか、パニックを起こし、保健室に担ぎこまれるケースも見られている。その結果、出席日数不足で留年したり、治療の為に休学、また退学といったケースも見られる様になって来た。

なぜ、この様に今日の青年女子が、以前に比べて心理的問題を持つ様になってきたのか。著者は過去の不登校児などを中心に置いた一連の研究<sup>1) 2) 3) 4) 5) 6) 7)</sup>を通して、心理的問題を持つ様になったのは、子ども時代に周囲の人から受容されず、自分自身を受け入れられない「自己否定」の状態に陥った為であると考えている。そして現在の症状は、この受け入れない不満の叫びであり、自己否定感のある現状を、なんとか自己肯定感が感じられる自己へと、再体制化しようとする姿であると捉えている。

この自己否定感をつくりあげる周囲の人としては、学校の先生や、仲間、きょうだい、親族、近隣の人など、色々な人が挙げられるが、やはり何といっても、一番関係するのは、両親である。親は子どもにとって支えであり、他の周囲の人から、どんなに心理的に危機な状態に追いこまれても、親が「安全基地」の働きをしさえすれば、子どもはその危機から逃れる事が出来るし、心が癒される。

しかし、この安全基地の働きをなしえない親が、今日多く出現しているのが現実である。親自身その生育の過程において、心理的危機となる体験をし、親となった今でも不安定のままの状態である事がある。例えば虐待する親は、自身が幼ない時、被虐待児であったという世代連鎖といわれる事象は、その代表的なものである。また結婚生活がうまくゆかず、いつも夫婦ゲンカばかりで、自身の心の安定さえ確保出来ず、到底子どもの方には目を向けられない親も多い。この様に親自身が心の不安定感を持っている、また、いた事が、その子どもである青年女子のパーソナリティに、どう影響するのか、本研究では、前述の後者の、結婚生活の両親の仲に焦点を当て、影響度をみる事にした。

両親の仲が、子どもにどう影響するかについて、Schaffer, H.R.<sup>8)</sup>は、文中の「両親の争いは子どもの幸せに影響するか」という題で、今までにこの関連で研究されたものを整理し、そこで言えることを述べている。

そこで、まず取り上げられた研究を見ていくことにする。最初はJenkins, J.M.とSmith, M.A.<sup>9)</sup>研究である。これはアメリカの9歳から12歳までの子どものいる119家族を対象とし、子どもと、その母親、父親に面接調査を行なっている。まず両親の関係においては、調和-不調和尺度を用いて評価し、次に①表だった親同士の争いの頻度、②関係における潜在的な緊張の量、③育児の仕方に関する両親間の食い違いの程度の3つの側面について調べている。一方子どもについては、適応という面から、現われている症状を内向性問題(うつ、不安、不登校、痛みや苦痛など)と外向性問題(攻撃、反抗、かんしゃく、うそ、窃盗など)の2つに分類し、その関係を見たのである。その結果、両親の関係の3つの側面のうち①表だった争いが子どもの適応の問題に深く関わっていた。すなわち、親同士のこうした争いが頻繁になるほど、またはげしくなるほど、多くの子どもに、不適応行動、特に攻撃や窃盗など外向性問

題が見られたという事である。また親の争いが増えるにつれ、親子関係の質の低下が見られた。すなわち子どもを養育しなくなったり、子どもに対して親の攻撃の量が増大したのである。

次に取り上げられてる研究は、Jenkins, J.M.らのが児童期の子どもと親だったのに対して、もっと年齢幅を上げて、青年期まで拡大したもので、親の争いと、少年非行の関連をみたものである。それはFergusson, D.M.とLynskey, M.T.の研究である。この研究はニュージーランドで行なわれたもので、700組以上の子どもとその親が対象となっている。離婚や別居、死亡その他親側の様子が変わる事や、親の不和などは1年ごとに面接を通して、情報を集められている。また子どもの触法行為については12歳と13歳の時に行なわれた自己報告調査記録に基づいてなされている。その結果、子どもの触法行為の危険性と、家族の変化とは関係なかったが、親の不和と関係している事が明らかになった。しかも子どもが小さかった頃、親の不和な場面に遭遇する程、触法行為の危険性が高まっていた。またこの触法行為には、生得的な性差があるのか（女性よりも男性の方が法に逆らいやすい）親の不和を経験せず、初期の触法行為のレベルの低い女性は、13歳まで触法行為の可能性はゼロに近かった。一方、親の不和状態にさらされ、初期の触法行為のレベルの高い男性は、触法行為の危険性が90%に近かったとしている。

以上、2つの研究の他、夫の暴力など家庭内の不和の子どもへの影響などを研究したのも取り挙げ、Schatter, H.R.<sup>3)</sup>は、両親の争いは子どもの幸せに影響するかという題に、次の様な結論を出している。すなわち、「両親の争いが、ある状況下では、子どもの心理的混乱につながりうる」という事である。だが第一に、それがどんな条件なのか、そして第二に、どのようにこの関連が生じるかについては、あまりはっきりとはしておらず可能性のレベルのものであるとしている。第一の点の条件については、争いの頻度と激しさ、また争いの様式をあげている。つまり幼ない子どもにとっては、少なくとも身体的に表現された攻撃性は、言語的に表現された攻撃性に比べて、より大きな衝撃がある。また、争いの終わり方も重要であり、何らかの解決を見て終わる争いは、その後の子どもの記憶の中で害のないものとなっていく様であるが、一方、解決されないままの破壊的な争いは、その後の子どもの記憶に、害のあるものとして残るであろうとしている。そして第二の点の、どのようにこの関連が生じるかについては、次の様な可能性があるとして述べている。まず両親の争いを子どもが模倣して、攻撃性にふるまう事を学ぶのである。次に、心拍数、血圧、皮膚伝導など生理的機能は、両親の争いという情動的喚起によって、大きな影響を受けやすい。もし持続的に影響を受ければ、正常な生理的機能は害され、それが心理的機能にも大きなマイナスの影響を及ぼす。さらに、両親の争いは親たちにうつや緊張、失敗感、極端な自己への閉じこもりといった反応を引き起こす。その結果正常な養育行動は行なえなくなる。すなわち、親から受けるふるまいが首尾一貫せず、罰に頼ったり、過度に優しくかったり、応答性が鈍かったりするのである。この様な養育を経験した子どもの反応には、色ん

なタイプがある。例へば、攻撃性の高まった子ども達もいれば、他方で落ち込んだり、不安定になったり、怒られたりする子ども達もいる。またなかには、両親の仲裁に入るといった、もっと積極的な方法もとる子もいる。しかしいずれにしても、子どもの反応は、苦痛と情動喚起であり、心が傷つかないという証拠はどこもないのである。

だが、たとえこの苦痛や情動喚起が、両親の争に起こる可能性があっても、子どもは情動的安全 (Emotional Security) を保つ為に、何らかの方策を用いるのではないか。その用い方によって心の傷の程度も違ってくると仮定し、その方策の仕方をみようとしたのが次の研究である。それはDavis, P.T.他<sup>11)</sup>らの研究である。彼等は924組の12歳から14歳の子どもと両親、また客観性を保つために、その子どもの担任教師を対象とし、調査し、因子分析の方法を用いて、7つの因子を見出した。その因子とは①情動的反応 (Emotional Reactivity) といわれるもので、悲しむ、怒るなどの項目である。②家族的主張の建設 (Construction Family Representation) といわれるもので、家族はそれでも、うまくやっていけるだろうなどの項目である。③行動的不規則 (Behavioral Dysregulation) といわれるもので、たたいたり、けったり、不人情な事を言うなどの項目がある。④家族的主張の破壊 (Destruction Family Representations) といわれるもので、両親が別居あるいは離婚するか、知りたいと思うかなどの項目がある。⑤回避 (Avoidance) といわれるもので、両親から逃げようとするなどの項目がある。⑥葛藤的思いの主張 (Conflict Spillover Representations) といわれるもので、これは自分に責任があると感じるなどの項目がある。⑦巻きぞえ (Involvement) といわれるもので、他の事を持ちだす事で、気をまぎらわすなどの項目がある。以上、この研究における7つの情動的安全を保つ為の方策の因子を見てきたが、今回の研究でも焦点の1つとして、この方策の違いが心の傷の程度に違いがあるかを見ようとする。しかし、年少時期にしかも男性によくみられる①情動的反応、③行動的不規則は、対象者が青年期の女性なので、除くことにした。そして、②家族的主張の建設、④家族的主張の破壊、⑥葛藤的思いの主張、といった内面的主張や思い、また⑤回避、⑦巻きぞえなど、その時起こす行動を見ることにした。

以上、両親の不和に対する、子ども側の方策を見てきたが、子ども側にどのような影響を与えるかについては、前述のJenkins, J.M.とSmith, M.A.の研究<sup>9)</sup>での内向性問題と外向性問題といった分類の仕方と、外向性問題が多くみられたという結果、またFergasson, D.M.らの外向性問題から生じやすい触法行為は、生得的な性差からか男性に多く見られたという結果などを参考にした。そして今回の対象者は青年期の女性であるという事を考慮して、内向性問題 (うつ、不安、不登校、痛みや苦痛など) に焦点を当てて調べる事にした。これはまさしく今日の某女子学生が抱えている心理的問題でもある。またこれらの問題に加えて、過去の一連の研究<sup>3) 4) 5)</sup>で明らかになった、心理的問題を起こす「自己否定」の状態をみようとして、①他者への不信感、②自己への信頼の無さについても調べ、また結婚観についても、少し問題にした。

さらに両親の関係を含む、家族全体の問題を、筆者の臨床経験をもとにして、フェースシートの部分として問題につけ加えた。

## II. 方法

### 1、対象者

某女子大学生 216名

### 2、調査

アンケート調査で5段階評定法－(資料1)

本アンケートは、「人間形成に関わる家庭環境について」という題のもので、3つの分野によって質問項目が構成されている。

その1は、「環境の内容」と題されているもので、夫婦関係を含む、家族全体の問題や、臨床的経験に基づいて筆者が重要と思った事を、10項目にわたって尋ねている。いわゆるフェースシートの部分である。

その2は「対処の仕方」と題されているもので、両親の争いの時、情動的安全を保つ為の方策を調べたものである。前述した様にDavies,P.T.らの研究<sup>1)</sup>を参考にして、②家族的主張の建設－Q11、Q14、④家族的主張の破壊－Q12、Q13、Q18、⑥葛藤的思いの主張－Q15、Q16、Q17、といった内面的思いや感じを、尋ねた項目である。また⑤回避－Q23、Q24、Q25、Q26、⑦巻きぞえ－Q19、Q20、Q21、Q22は、その時起こす行動を尋ねた項目である。

その3は「アダプテーション(適応)」と題されたもので、内向性問題－Q27、Q28、Q29、Q30、Q31、Q32、Q33、Q34と、他者への信頼－Q35、Q36、Q37、Q38、自己への信頼－Q39、Q40、結婚観－Q41、Q42、などを尋ねた項目である。

### 3、調整時期

2003年1月～4月

### 4、分析方法

SPSSによる単純集計及び多変量解析法

### Ⅲ. 結果

#### 1. 単純集計結果

##### (1) 環境の内容

Q1. 他の異性関係で、夫婦仲が悪かった。

	度数	パーセント
い つ も	1	.4
と き ど き	7	3.1
ど ち ら と も	15	6.7
あ ま り	25	11.2
ぜ ん ぜ ん	168	75.3
不 明	7	3.1
合 計	223	100.0

いつも、時々を合わせても3.5%、どちらともを合わせても10%程度であった。

Q2. 転居が多く、周囲になじむのに苦労した。

	度数	パーセント
い つ も	1	.4
と き ど き	12	5.4
ど ち ら と も	5	2.2
あ ま り	23	10.3
不 明	182	81.6
合 計	223	100.0

いつも、時々を合わせても5.8%で、20人に1人強の者が苦労したと答えている。

Q3. 経済的に苦労した。

	度数	パーセント
い つ も	12	5.4
と き ど き	29	13.0
ど ち ら と も	43	19.3
あ ま り	67	30.0
ぜ ん ぜ ん	70	31.4
不 明	2	.9
合 計	223	100.0

いつも、時々を合わせても5.4%、時々が13%で、合わせて18.4%の者が苦労したと答えている。さらにどちらともを加えると37.7%に及ぶ。

Q4. 父親がこどもの面倒を見ようとしないので、母親が不満となり、口論する事が多かった。

	度数	パーセント
い つ も	8	3.6
と き ど き	19	8.5
ど ち ら と も	22	9.9
あ ま り	49	22.0
ぜ ん ぜ ん	123	55.2
不 明	2	.9
合 計	223	100.0

いつもが3.6%、時々が8.5%で、合わせて12.1%の者が口論する事があると答えている。

Q5. 母親がこどもの面倒を見ようとしないので、父親が不満となり、口論する事が多かった。

	度数	パーセント
い つ も	2	.9
と き ど き	3	1.3
ど ち ら と も	7	3.1
あ ま り	27	12.1
ぜ ん ぜ ん	182	81.6
不 明	2	.9
合 計	223	100.0

いつもが0.9%、時々が1.3%で、合わせても2.2%となり、父親に比べて母親は、子どもをよく見ているという事を、はっきり示す結果であった。

Q6. 片方の祖父母が、子どもに口出しする事多く、しつけ方で対立する事が多かった。

	度数	パーセント
い つ も	2	.9
と き ど き	8	3.6
ど ち ら と も	14	6.3
あ ま り	38	17.0
ぜ ん ぜ ん	161	72.2
合 計	223	100.0

いつもが0.9%、時々が3.6%で、合わせて4.5%の者が対立する事があると答えている。

Q7. 片方の祖父母、子どもの自立を急ぐ事が多く、しつけ方で対立する事が多かった。

	度数	パーセント
い つ も	1	.4
と き ど き	4	1.8
ど ち ら と も	11	4.9
あ ま り	21	9.4
ぜ ん ぜ ん	185	83.0
不 明	1	.4
合 計	223	100.0

いつもが0.4%、時々が1.8%で、合わせてもわずか2.2%の者しか、対立する事があると答える者はいなかった。

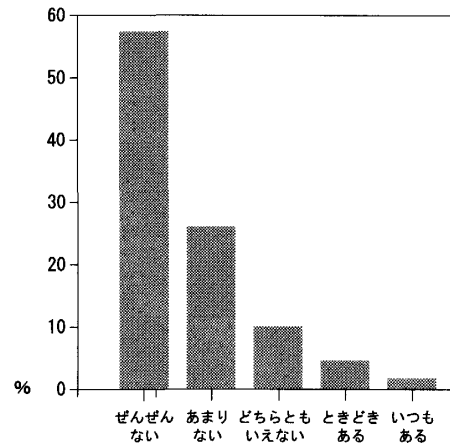
Q6、Q7から、祖父母の関わりでの、家庭内の対立は、そう多く見られなかった。

Q8. こどもから見て、両親はどうでもいい事は沢山してくれたが、肝心な事はしてもらわなかった気がする

こどもと親のズレをみたものであるが、いつもが1.8%、時々が4.5%で、合わせて6.3%の者がこのズレを感じている。またどちらともを入れると17.1%になる。これを図で示すと図1の様になる。

	度数	パーセント
い つ も	4	1.8
と き ど き	10	4.5
ど ち ら と も	24	10.8
あ ま り	58	26.0
ぜ ん ぜ ん	127	57.0
合 計	223	100.0

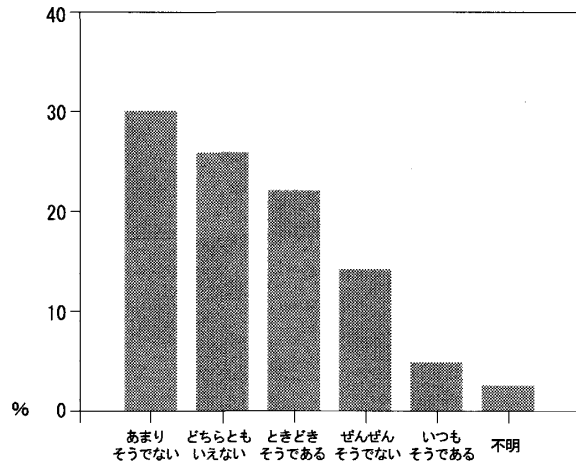
図 1



Q9. こどもから見て、父親はあまりにも忙しいそうだった。

	度数	パーセント
い つ も	17	7.6
と き ど き	49	22.0
ど ち ら と も	58	26.0
あ ま り	68	30.5
ぜ ん ぜ ん	30	13.5
不 明	1	.4
合 計	223	100.0

図 2

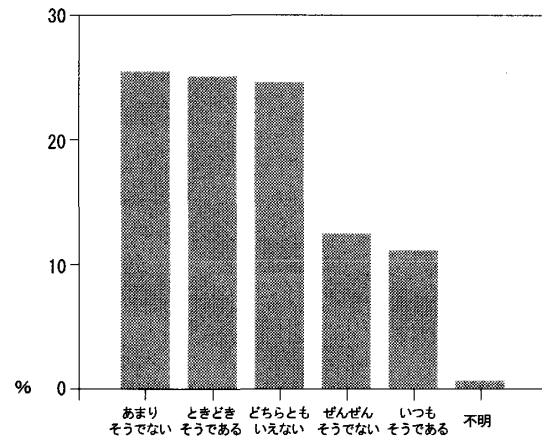


いつもが7.6%、時々が22.0%で、合わせて29.6%の者が、忙しいと思っている。どちらともを加えると、半数以上になり、現代社会の父親の多忙さを示す結果となっている。これを図2に示す。

Q10. こどもから見て、母親はあまりにも忙しそうだった。

	度数	パーセント
い つ も	26	11.7
と き ど き	56	25.1
ど ち ら と も	54	24.2
あ ま り	58	26.0
ぜ ん ぜ ん	28	12.6
不 明	1	.4
合 計	223	100.0

図 3



いつもが11.7%、時々が25.1%で、合わせて36.8%の者が、忙しいと思っている。どちらともを加えると、60%強になり、父親以上に母親が多忙であると、こどもの目には映っていた。これを図3に示す。



(2) 対処の仕方

A. 内面的思いや感じ

Q11. 両親はそれでも、お互いを愛しているかどうか、知りたいと思いましたが。

	度数	パーセント
い つ も	5	2.2
と き ど き	39	17.5
ど ち ら と も	55	24.7
あ ま り	48	21.5
ぜ ん ぜ ん	66	29.6
不 明	10	4.5
合 計	223	100.0

いつもが2.2%、時々が17.5%で、合わせて19.7%。5人に1人弱がお互い愛しているか、知りたいと思っている。

Q12. 両親が別居あるいは離婚するか、知りたいと感じましたか。

	度数	パーセント
い つ も	14	6.3
と き ど き	31	13.9
ど ち ら と も	43	19.3
あ ま り	35	15.7
ぜ ん ぜ ん	89	39.9
不 明	11	4.9
合 計	223	100.0

いつもが6.3%、時々が13.9%で、合わせて20.2%。5人に1人強が、別居あるいは離婚するかを知りたいと思っている。これは前問の、お互いを愛しているかより、わずかばかり高い値である。

Q13. 両親が次に何をしようとしているのか、心配でしたか。

	度数	パーセント
い つ も	15	6.7
と き ど き	31	13.9
ど ち ら と も	30	13.5
あ ま り	39	17.5
ぜ ん ぜ ん	99	44.4
不 明	9	4.0
合 計	223	100.0

いつもが6.7%、時々が13.9%で、合わせて20.6%。前問の、別居あるいは離婚するかと、同じ傾向を示している。

Q14. 家族はそれでも、うまくやっているといますか？

	度数	パーセント
い つ も	66	29.6
と き ど き	33	14.8
ど ち ら と も	68	30.5
あ ま り	17	7.6
ぜ ん ぜ ん	28	12.6
不 明	11	4.9
合 計	223	100.0

いつもが29.6%、時々が14.8%で、合わせて44.4%。約半数弱の者が、うまくやっていると知っているが、反対に、ぜんぜんが12.6%、あまりが7.6%で、約5人に1人の者が、うまくやっていないと思っている。そしてこの比率は前問Q11、Q12、Q13と同じである。

Q15. この時、自分が両親から責められている様に、感じましたか。

	度数	パーセント
い つ も	6	2.7
ときどき	15	6.7
どちらとも	36	16.1
あ ま り	44	19.7
ぜんぜん	110	49.3
不 明	12	5.4
合 計	223	100.0

いつもが2.7%、時々が6.7%で、合わせて9.4%。約10人に1人の者が自分が責められている様に、感じていた。

Q16. これは、自分に責任があると感じましたか。

	度数	パーセント
い つ も	7	3.1
ときどき	28	12.6
どちらとも	29	13.0
あ ま り	45	20.2
ぜんぜん	101	45.3
不 明	13	5.8
合 計	223	100.0

いつもが3.1%、時々が12.6%で、合わせて15.9%で、Q15の自分が責められているより、自分に責任があると、感じる者の方が多かった。

Q17. この時、自分は争いのただ中にいるという、感じでしたか。

	度数	パーセント
い つ も	12	5.4
ときどき	19	8.5
どちらとも	44	19.7
あ ま り	45	20.2
ぜんぜん	88	39.5
不 明	15	6.7
合 計	223	100.0

いつもが5.4%、時々が8.5%、合わせて13.9%で、自分が責められていると、自分に責任があるの、中間の値を示した。

Q18. この時、自分がどうすれば仲良くやってくれるのか、わからないので、不安に感じるがありますか。

	度数	パーセント
い つ も	21	9.4
ときどき	36	16.1
どちらとも	39	17.5
あ ま り	33	14.8
ぜんぜん	80	35.9
不 明	14	6.3
合 計	223	100.0

いつもが9.4%、時々が16.1%、合わせて25.5%で、約4人に1人の者が不安に感じている。これは前問のQ12、Q13より、約5%高い値である。

**B. その時起こす行動**

Q19. この時、自分は一方か両方を、慰めようと思いましたか。

	度数	パーセント
い つ も	18	8.1
ときどき	45	20.2
どちらとも	51	22.9
あ ま り	24	10.8
ぜんぜん	73	32.7
不 明	12	5.4
合 計	223	100.0

いつもが8.1%、時々が20.2%、合わせて28.3%で、可成りのものが慰めようとしていた。しかし、全然しない者も約3人に1人の割合でいた。

Q20. この時、自分が他の事を持ち出して、両親の気をまぎらわそうと思いましたか。

	度数	パーセント
い つ も	12	5.4
ときどき	29	13.0
どちらとも	38	17.0
あ ま り	45	20.2
ぜんぜん	87	39.0
不 明	12	5.4
合 計	223	100.0

いつもが5.4%、時々が13.0%、合わせて18.4%で、前問の慰めるより低くなっている。これは直接的行為の慰めるより、他の事を持ち出して、気をまぎらわせるという、高度な技術を必要とする関係作りの為であろう。

Q21. この時、自分は、物事はうまくいっている様なふりをしようと思いましたか。

	度数	パーセント
い つ も	11	4.9
ときどき	27	12.1
どちらとも	48	21.5
あ ま り	38	17.0
ぜんぜん	86	38.6
不 明	13	5.8
合 計	223	100.0

いつもが4.9%、時々が12.1%、合わせて17.0%で、この行為をする者は、他と比較して少なかった。

22. この時、自分は、両親のために、問題を解決しようと思いましたか。

	度数	パーセント
い つ も	12	5.4
ときどき	36	16.1
どちらとも	60	26.9
あ ま り	31	13.9
ぜんぜん	69	30.9
不 明	15	6.7
合 計	223	100.0

いつもが5.4%、時々が16.1%、合わせて21.5%と、約5人に1人が、問題の解決に、積極的に関わっている事がわかった。Q19の慰めや、この問題解決など積極的に関わる者が、20~30%の割合で認められたのである。

Q23. この時、自分は両親から逃げようと思いましたか。

	度数	パーセント
い つ も	9	4.0
と き ど き	22	9.9
ど ち ら と も	39	17.5
あ ま り	40	17.9
ぜ ん ぜ ん	97	43.5
不 明	16	7.2
合 計	223	100.0

いつもが4.0%、時々が9.9%、合わせて13.9%で、この様に、両親から逃げるという、直接的回避行動を示す者は少なかった。

Q24. この時、自分は平等を保ち、待てば事態が好転するだろうと、思いましたか。

	度数	パーセント
い つ も	34	15.2
と き ど き	31	13.9
ど ち ら と も	60	26.9
あ ま り	29	13.0
ぜ ん ぜ ん	56	25.1
不 明	13	5.8
合 計	223	100.0

いつもが15.2%、時々が13.9%、合わせて29.1%で、待てば好転するだろうと思ひ、平静を保つという、回避を直接には表わさない行動を示す者が多かった。

Q25. この時、自分は何かをしたかったが、結局何もしなかったですか。

	度数	パーセント
い つ も	24	10.8
と き ど き	27	12.1
ど ち ら と も	83	37.2
あ ま り	14	6.3
ぜ ん ぜ ん	59	26.5
不 明	16	7.2
合 計	223	100.0

いつもが10.8%、時々が12.1%、合わせて22.9%で、やりたくても、何もしなかったと答えた者が、約5人に1人の割合でいた。

Q26. この時、自分がどうすべきかわからない状態でしたか。

	度数	パーセント
い つ も	24	10.8
と き ど き	39	17.5
ど ち ら と も	70	31.4
あ ま り	14	6.3
ぜ ん ぜ ん	61	27.4
不 明	15	6.7
合 計	223	100.0

いつもが10.8%、時々が17.5%、合わせて28.3%であった。回避行動の面からみると、10~30%の範囲でみられ、それも直接的行動に出るより、葛藤の中でどう行動すべきか迷っている、子どもの姿が見られた。

(3) アダプテーション

A. 内向性問題

Q27. あなたは、身体の何処も痛む事がなく、元気ですか。

	度数	パーセント
い つ も	18	8.1
と き ど き	45	20.2
ど ち ら と も	51	22.9
あ ま り	41	18.4
ぜ ん ぜ ん	66	29.6
不 明	2	.9
合 計	223	100.0

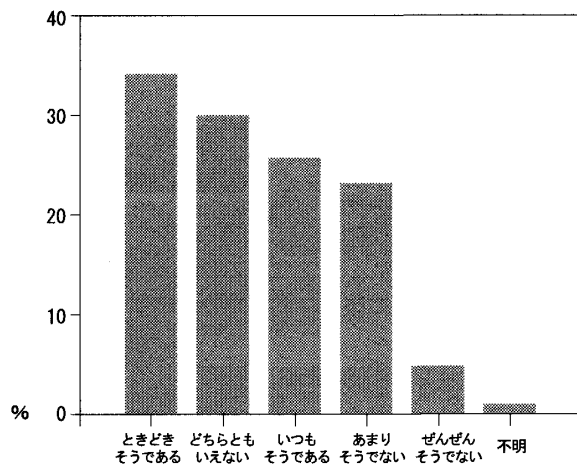
ぜんぜんが29.6%、あまりが18.4%、合わせて48.0%の者、約2人に1人の者が、それほど元気でないと答えている。

Q28. あなたは、すぐ感情を傷つけられやすいですか。

	度数	パーセント
い つ も	36	16.1
と き ど き	77	34.5
ど ち ら と も	69	30.9
あ ま り	30	13.5
ぜ ん ぜ ん	9	4.0
不 明	2	.9
合 計	223	100.0

いつもが16.1%、時々が34.5%、合わせて50.6%、約2人に1人が、すぐ感情を傷つけられやすいと答えていた。これを図4に示す。

図 4



Q29. あなたは、食欲があり、何を食べてもおいしく感じますか。

	度数	パーセント
い つ も	117	52.5
と き ど き	51	22.9
ど ち ら と も	39	17.5
あ ま り	10	4.5
ぜ ん ぜ ん	2	.9
不 明	4	1.8
合 計	223	100.0

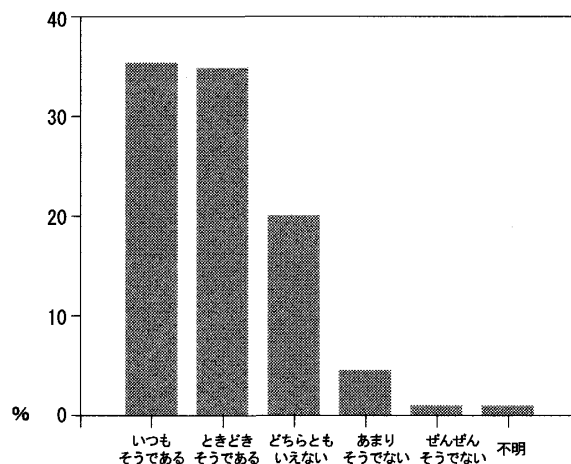
ぜんぜんが0.9%、あまりが4.5%、合わせて5.4%、約20人に1人が、あまり食欲がなく、何を食べてもおいしくないと答えていた。

Q30. あなたは、何かにつけて、よく心配する方ですか。

	度数	パーセント
い つ も	83	37.2
と き ど き	80	35.9
ど ち ら と も	46	20.6
あ ま り	10	4.5
ぜ ん ぜ ん	2	.9
不 明	2	.9
合 計	223	100.0

いつもが37.2%、時々が35.9%、合わせて73.1%、約4人に3人が、よく心配する方だと答えている。これを図5で示す。

図 5



Q31. あなたは、怖い夢で目をさます事がよくありますか。

	度数	パーセント
い つ も	17	7.6
と き ど き	46	20.6
ど ち ら と も	43	19.3
あ ま り	56	25.1
ぜ ん ぜ ん	58	26.0
不 明	3	1.3
合 計	223	100.0

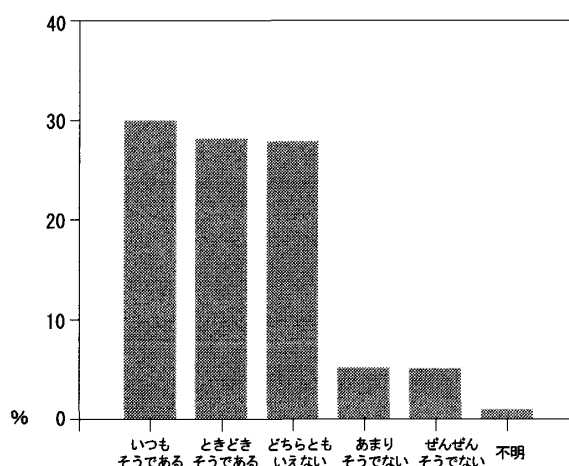
いつもが7.6%、時々が20.6%、合わせて28.2%の者が、怖い夢で目をさます時があると答えている。

Q32. あなたは、学校生活が楽しく、結構毎日元気で、登校していますか。

	度数	パーセント
い つ も	67	30.0
と き ど き	63	28.3
ど ち ら と も	62	27.8
あ ま り	19	8.5
ぜ ん ぜ ん	10	4.5
不 明	2	.9
合 計	223	100.0

ぜんぜんが4.5%、あまりが8.5%、合わせて13.0%の者が、あまり楽しくなく登校していると答えている。これを図6で示す。

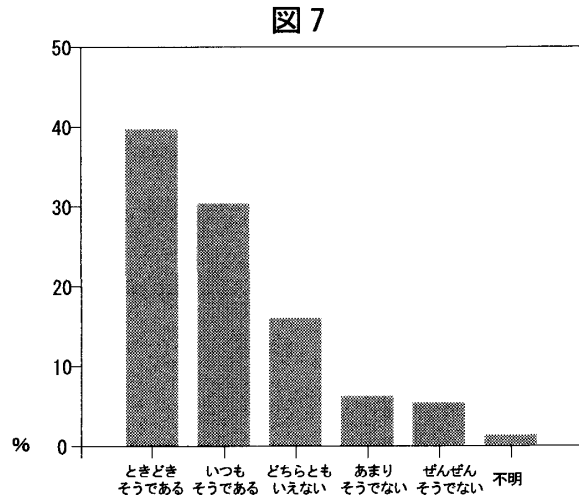
図 6



Q33. あなたは、外で人から見られると、気になる方ですか。

	度数	パーセント
い つ も	70	31.4
と き ど き	88	39.5
ど ち ら と も	37	16.6
あ ま り	15	6.7
ぜ ん ぜ ん	10	4.5
不 明	3	1.3
合 計	223	100.0

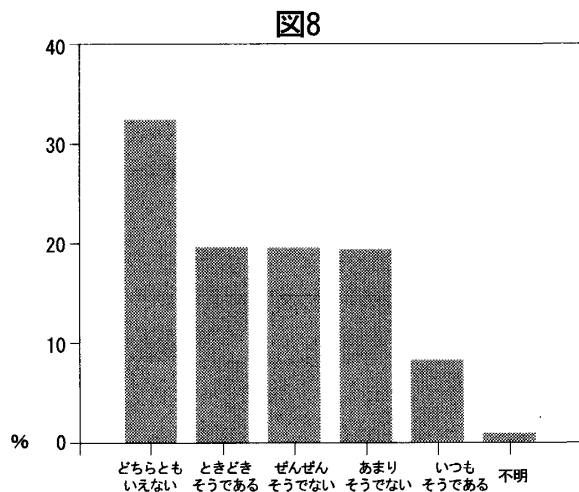
いつもが31.4%、時々が39.5%、合わせて70.9%、約10人に7人の者が、外で人から見られると、気になると答えている。これを図7で示す。



Q34. あなたは、他人から、仲間外れにされていると、感じる事がありますか。

	度数	パーセント
い つ も	18	8.1
と き ど き	44	19.7
ど ち ら と も	72	32.3
あ ま り	43	19.3
ぜ ん ぜ ん	44	19.7
不 明	2	.9
合 計	223	100.0

いつもが8.1%、時々が19.7%、合わせて27.8%、約4人に1人の者が、仲間外れにされていると感じると答えています。これを図8で示す。



## B. 他者への不信感

Q35. あなたは、今は何でも話せても、他人は所詮全く当てにならないものであると思いますか。

	度数	パーセント
い つ も	10	4.5
と き ど き	27	12.1
ど ち ら と も	70	31.4
あ ま り	53	23.8
ぜ ん ぜ ん	59	26.5
不 明	4	1.5
合 計	223	100.0

いつもが4.5%、時々が12.1%、合わせて16.6%の者が、他人は当てにならないと答えていた。

Q36. あなたは、これまで出会った人は、よくしてくれた、と思いますか。

	度数	パーセント
い つ も	91	40.8
と き ど き	85	38.1
ど ち ら と も	40	17.9
あ ま り	3	1.3
ぜ ん ぜ ん	2	.9
不 明	2	.9
合 計	223	100.0

ぜんぜんが0.9%、あまりが1.3%、合わせて2.2%の者しか、よくしてくれなかったと認めていず、ほとんどの者が、よくしてくれたと認めていた。

Q37. あなたは、無理をしなくても、この先の人生で、信頼できる人に、出会えるだろうと思いますか。

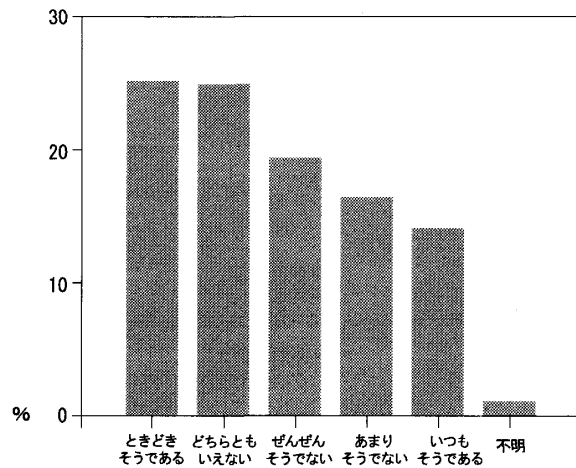
	度数	パーセント
い つ も	67	30.0
と き ど き	62	27.8
ど ち ら と も	70	31.4
あ ま り	19	8.5
ぜ ん ぜ ん	2	.9
不 明	3	1.3
合 計	223	100.0

ぜんぜんが0.9%、あまりが8.5%、合わせて9.4%、約10人に1人の者が信頼できる人に、出会えないかも知れないと認めている。

Q38. あなたは、過去に、誰かに裏切られたり、だまされたりで、他人を信じる事が、怖くなっていますか。

	度数	パーセント
い つ も	31	13.9
と き ど き	55	24.7
ど ち ら と も	54	24.2
あ ま り	37	16.6
ぜ ん ぜ ん	43	19.3
不 明	3	1.3
合 計	223	100.0

図9



いつもが13.9%、時々が24.7%、合わせて38.6%、約10人に4人が、過去に裏切られた経験などから、他人を信じる事が怖くなっていると答えている。しかし前問のQ36、Q37などから、それでも多く

の者は、他者への信頼を持ち続けたいという気持ちを持っている事がわかる。なおQ38の結果を図9で示す。



C. 自己への信頼の無さ

Q39. あなたは、自分自身を信頼に値する人間だと、思いますか。

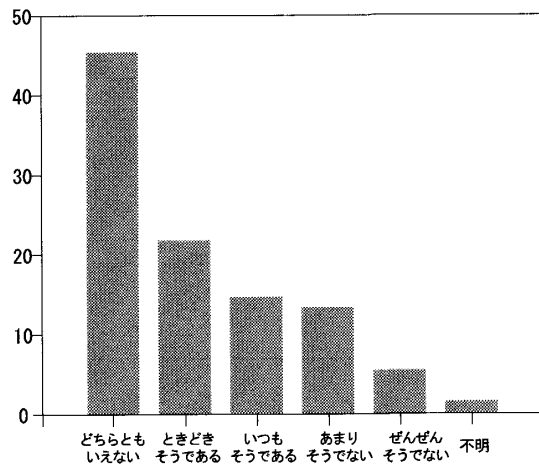
	度数	パーセント
い つ も	9	4.0
と き ど き	46	20.6
ど ち ら と も	126	56.5
あ ま り	25	11.2
ぜ ん ぜ ん	11	4.9
不 明	6	2.7
合 計	223	100.0

ぜんぜんが4.9%、あまりが11.2%、合わせて16.1%の者が、自分を信頼に値しない人間であると答えている。なおこの間には、「どちらとも」と判断つきかねている者が半数以上いる。

Q40. あなたは、自分は自分で、決して他人にとって変わる事の出来ない存在であると、思いますか。

	度数	パーセント
い つ も	33	14.8
と き ど き	47	21.1
ど ち ら と も	101	45.3
あ ま り	28	12.6
ぜ ん ぜ ん	11	4.9
不 明	3	1.3
合 計	223	100.0

図10



ぜんぜんが4.9%、あまりが12.6%、合わせて17.5%の者が、自分を他人にとって、変わる事の出来ない存在とは思っていない。これも前問Q39と同じ傾向である。すなわち自己への信頼の無さについては、16~18%の者が、信頼の無さを示している。また判断つきかねてる者も多い。なおQ40の結果を図10で示す。

D. 結婚観

Q41. あなたは、将来、必ず結婚しようと思っ、ていますか。

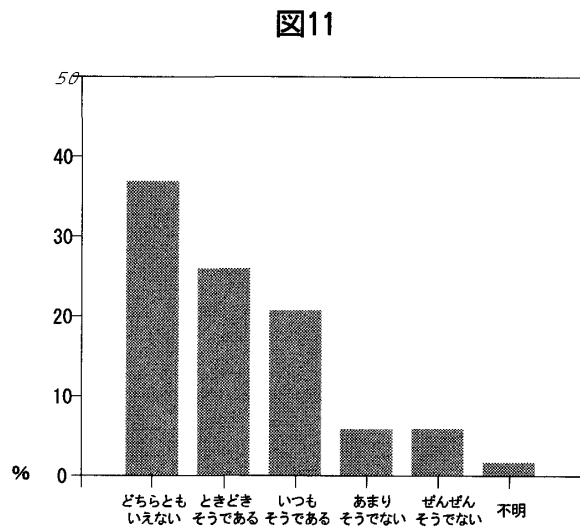
	度数	パーセント
い つ も	123	55.2
と き ど き	45	20.2
ど ち ら と も	41	18.4
あ ま り	5	2.2
ぜ ん ぜ ん	7	3.1
不 明	2	.9
合 計	223	100.0

いつもが55.2%、時々が20.2%、合わせて75.7%、約4人に3人の者が、必ず結婚しようと思っている。ぜんぜんの3.1%、あまりの2.2%と、結婚に否定的な者は5.3%で、約20人に1人にすぎない。

Q42. あなたは、結婚生活で、かなりひどいけんかあっても、しょうがないと、思いますか。

	度数	パーセント
い つ も	48	21.5
と き ど き	58	26.0
ど ち ら と も	84	37.7
あ ま り	15	6.7
ぜ ん ぜ ん	15	6.7
不 明	3	1.3
合 計	223	100.0

いつもが21.5%、時々が26.0%、合わせて47.5%、約半数の者が、結婚生活には、かなりひどいけんかがあってもしょうがないと思っている。しかし、ぜんぜん6.7%、あまり6.7%で、合わせて13.4%の者は、ひどいけんかを受け入れていない。これを図11に示す。



## 2. 分野別項目の因子抽出

今回の質問項目は、3つの分野から成っている。その2.3は、先行研究の因子を参考に項目を設定したのであるが、今回は、その結果を分析し、因子を抽出する事にした。そして、その因子から、相互の関係をみようとしたのである。なお因子分析では、バリマックス法を用いた。

表1

項 目	因 子			
	1	2	3	4
Q1 異性関係	.327	.001	.170	.042
Q2 転居	.170	.135	.052	.326
Q3 経済的苦労	.290	.268	.323	.245
Q4 父母の面倒	.497	.132	.315	.009
Q5 母親の面倒	.606	-.212	.277	-.338
Q6 子どもに口出し	.706	-.352	-.369	.233
Q7 子どもの自立を急ぐ	.712	-.280	-.198	.020
Q8 肝心な事	.455	.086	.262	-.103
Q9 父親忙しい	.303	.387	-.386	-.295
Q10 母親忙しい	.396	.641	-.211	.044

表1のように、4つの因子が見出されている。第1因子は、「家族内の対立、不仲」というもので、両親の関係も親子関係も望ましい状態ではない。これにはQ1、Q4、Q5、Q6、Q7、Q8の項目がはいる。第2因子は、「両親が忙しい」というもの

で、Q 9、Q10の項目がはいる。第3因子は、「経済的苦労」というもので、Q 3の項目のみである。第4因子は、「転居が多い」というもので、Q 2の項目のみである。

## (2) 対処の仕方

表2

項 目	因 子		
	1	2	3
Q11 お互い愛しているか	.590	.099	.064
Q12 別居あるいは離婚するか	.636	-.255	.051
Q13 次に何をしようとしているのか	.684	-.167	.042
Q14 それでもうまくやっっていける	.022	.466	.095
Q15 自分が責められる	.629	-.217	.083
Q16 自分に責任がある	.695	-.233	.104
Q17 争いのただ中にいる	.795	-.336	.048
Q18 どうすれば仲良くなるか	.773	-.244	.073
Q19 慰めようとする	.643	.113	-.264
Q20 気をまぎらわそうとする	.663	.320	-.428
Q21 物事はうまくいくふりをする	.702	.213	-.190
Q22 問題を解決しようとする	.664	.226	-.249
Q23 両親から逃げる	.643	-.153	.099
Q24 平静を保つ	.467	.565	.148
Q25 結局何もしなかった	.593	.230	.533
Q26 どうすべきかわからない	.728	.103	.320

表2のように、3つの因子が見出されている。第1因子は、Davis, P.T.<sup>1)</sup>らの分析した、Q14のみ除いた「②家族的主張の建設、④家族的主張の破壊、⑥葛藤的思いの主張などの内面的思いや感じ、また⑦巻きぞえや一部⑤回避といった行動」によって成り立つものである。すなわち、「両親の争いに困惑しながら、こどもなり関わっていきこうする」ものである。これにはQ11、Q12、Q13、Q14、Q15、Q16、Q17、Q18、Q19、Q20、Q21、Q22、Q23、Q25、Q26の項目がはいる。第2因子は「楽観的なとらえ」といえるものである。Q14、Q24、の項目がはいる。第3因子は、行動から「回避」と、いえるものである。Q25、Q26の項目がはいる。

## (3) アダプティション

表3のように、5つの因子が見出されている。第1因子は「内向性問題、特に対人関係などに不安を持っており、それが他者への不信感へとつながっている」というものである。これには、Q27、Q28、Q30、Q31、Q33、Q34、Q35、Q38の項目がはいる。第2因子は、「他者への信頼感もあり、現在も適応し、将来へ明るい展望を持っている」というものである。これには、Q32、Q36、Q37、Q41の項目がはいる。第3因子は、「自己への信頼」といえるもので、これには、Q39、Q40の項目がはいる。第4因子は、「結婚での争いをしかたがないと考えながら、他者へ不信感」を持って

いるものである。これには、Q35、Q42の項目がはいる。第5因子は、ただ単に「他者への信頼」といえるものである。これにはQ36の項目がはいる。

表3

項 目	因 子				
	1	2	3	4	5
Q27 身体が痛くなく元気	.325	.146	-.240	.108	-.064
Q28 すぐ感情を傷つけられる	.656	.287	-.007	-.077	-.121
Q29 食欲がある	-.203	.147	.038	.067	.223
Q30 よく心配する	.445	.291	.134	-.173	.110
Q31 怖い夢で目をさます	.429	.226	.009	-.148	-.081
Q32 元気で登校	-.328	.407	-.010	-.128	-.058
Q33 外で見られると気になる	.618	.283	.005	-.218	.128
Q34 仲間外れにされている	.678	.088	.043	-.007	.055
Q35 他人は当てにならない	.518	-.163	.223	.557	.147
Q36 出会った人はよくしてくれた	-.279	.634	-.186	.094	.395
Q37 信頼できる人に出会える	-.341	.494	-.240	.110	-.068
Q38 裏切られ、他人を信じられない	.554	.168	-.025	.131	-.057
Q39 自分は信頼に値する	-.175	.444	.441	-.032	-.181
Q40 自分は変わる事が出来ない存在	-.276	.251	.445	.143	-.001
Q41 将来、結婚する	-.205	.345	.117	.097	-.128
Q42 結婚はけんかがある	.074	.291	-.281	.322	-.270

### 3. 分野別項目間の関係

以上、分野別に因子分析したら (1) 環境の内容が4因子、(2) 対処の仕方が3因子、(3) アダプティションが5因子抽出する事が出来た。そこで、この研究の本題である「両親の不和が子の心理的発達に及ぼす影響—女子青年の場合—」はどのようなものかを見る為、(3) アダプティションを中心軸とし、それに関わる(1) 環境の内容、(2) 対応の仕方の関係を因子同士の関連を中心に、みようとしたのである。

(1) 環境の内容×アダプティション

(2) 対応の仕方×アダプティション

なお検定には、のKruskal Wallisの検定法を用いた。F<.01—\*\* F<.05—\* で示す。また\*\* \*は項目間が逆な関係で有意義を示したものである。

#### (1) 環境の内容×アダプティション

環境の内容とアダプティションの関連をみたところ、表4の様な結果となった。そこで最初に環境の内容の第1因子である「家庭内の対立・不仲」をみていく事にする。まずアダプティションの第1因子「内向性問題と他者への不信」とは、強い関連は見出された。特にQ7の祖父母が子どもの自立を急ぎ、しつけ方まで対立するという項目が関連していた。第2因子「将来の明るさ」とは、逆な関係で有意差が出ており、将来は明るくないという見方をしていた。第3因子の「自己への信頼」も、Q8の両

表 4

			アダプテーション																
			第1因子					第2因子			第3因子		第4因子		第5因子	その他			
			内向性問題と他者への不信					将来への明るさ			自己への信頼		他者への不信		他者への信頼				
			Q27	Q28	Q30	Q31	Q33	Q34	Q38	Q32	Q37	Q41	Q39	Q40	Q35	Q42	Q36	Q29	
環境の内容	第1因子	家族内の対立・不仲	Q1								*	*							
			Q4				*			*									
			Q5					*	**									**	
			Q6																
			Q7		*		*		**	**									
			Q8						**	*	**			*	**			**	
	第2因子	忙しい両親が	Q9	*		*	*											*	
			Q10	*			**	*						**					
	第3因子	経済的苦労	Q3				*								*		*		
	第4因子	転居	Q2															**	

親に肝心な事はしてもらわなかったという項目で、逆な関係で有意差が出ていた。すなわち自己への信頼の無さを持っていた。第4因子は関連がなく、第5因子の「他者への信頼も、逆な関係で有意差が出ており、他者への不信感を持っていた。すなわち以上をまとめてみると、「それまでに多くの家族内の対立・不仲を経験すれば、青年期になると、内向性問題を持つ様になったり、将来への明るい見通しが無く、他者への不信感、自己への信頼の無さをより多く感じる様になる」と、言う事が出来る。

次に第2因子の「両親が忙しい」をみていく事にする。まずアダプテーションの第1因子「内向性問題と他者への不信」との関連は見出された。特に父親、母親両親とも、いそがしい時には、Q27の身体が痛く元気がない、Q31の怖い夢で目を覚ます、Q34の他人から仲間外れにされている、に該当すると答えている者が多く、親がいそがしいと、不安などからくる内向性問題を持っておる事がわかる。また第3因子の「自己への信頼」では逆の自己への信頼の無さを、第5因子の「他者への信頼」でも、逆の他者への不信感を持っていた。すなわち以上をまとめてみると、「両親がいそがしい家庭である場合、青年期になると、不安などからくる内向性問題を持つ様になったり、他者への不信感、自己への信頼の無さをより多く感じる様になる」と、言う事が出来る。

第3因子の「経済的苦労」では、苦労した者はQ34の仲間外れにされているという

内向性問題、Q35の他人は当てにならない、Q36のこれまで出会った人は、よくしてくれなかったという他者への不信感を、持ったり感じたりする者が多かった。

最後に第4因子の「転居」では、転居で他人によくしてもらった者が多い為か、他者への信頼を感じる者が多かった。

以上、環境の内容とアダプテーションの関連を見てきたが、「それまで育った家庭内の環境が、家族内の対立・不仲があったり、両親がいそがしかったり、経済的に苦労したりといった、子どもにとって不安などマイナス要因が多い場合、その子どもが女子大生という青年期になっても、対人関係の困難性など内向性問題を持っていたり、将来への明るい見通しも持てず、他者への不信感、自己への信頼の無さを持ち続けている」事が明らかになった。

### (3) 対処の仕方×アダプテーション

対処の仕方とアダプテーションの関連をみたところ、表5の様な結果となった。そこで最初の対応の仕方の第1因子である「内面的思いや感じと巻きぞえ的行動」をみていく事にする。まずアダプテーションの第1因子「内向性問題と他者への不信」とは、強い関連がある事が見出された。特にQ28の感情を傷つけられやすい、Q33の外で人から見られると気になる、Q34の他人から仲間外れにされている、といった、対人関係での困難性を訴える項目で有意差が多く出た。またQ38の他人を信じる事が怖くなったといった他者への不信項目、これは第4因子「他者への不信」のQ35、Q42の項目にも同じ事が言えるのだが、これらにも有意差が多く見出された。また第3因子の「自己への信頼」では、Q40の自分は自分で決して他人にとって変わる事の出来ない存在とは思わないと答える者が多く、逆の関係で有意差が出ていた。すなわち自己への信頼の無さを持っていた。以上の事をまとめてみると、「両親の争いの時に、内面的思いや感じで困惑し、巻きぞえ的行動を起こした者は、青年期になっても、対人関係で多くの困難性を抱えるなどの、内向性問題を持っている。また、他者への不信感、自己への信頼の無さをより多く感じている」と、言う事が出来る。

次に第2因子の「楽観的とらえ」をみていく事にする。この因子では、Q14の家族はそれでもうまくやっていけるが、アダプテーションの第2因子「将来への明るさ」と関連していた。またQ24の待てば事態は好転するが、第3因子の「自己への信頼」と、第4因子の「他者への不信」との逆の関係、すなわち他者へ信頼に関連していた。以上をまとめてみると、「両親の争いの時、その事態を楽観的にとらえた者は、青年期になっても、将来信頼出来る人に出会え、必ず結婚しようと思っているという、明るい展望を持っている。また他者への信頼感、自己への信頼感をより多く感じている」と、言う事が出来る。

最後に第3因子の「回避行動」をみていく事にする。この因子は第1因子「内面的思いや感じと巻きぞえ的行動」と、ほとんど同じ傾向を示しており、回避行動を起こした者は「青年期になっても、対人関係で多くの困難性を抱えるなどの、内向性問題

を持っている。また他者への不信感、自己への信頼の無さをより多く感じている」と、言う事が出来る。すなわち、両親の争いの時に、行動面で巻きぞえ的行動に出ようと、回避行動に出ようと、青年期までに影響するものは同じであるという事が出来る。ただし、前述の第2因子でみたように、この事態を、内面的思いや感じて困惑なものにとらえるか、逆に楽観的なものと、とらえるかによって、青年期までに影響するものは、全く違ってくるという事がわかった。

表5

		アダプテーション															
		第1因子						第2因子			第3因子		第4因子		第5因子	その他	
		内向性問題と他者への不信						将来への明るさ			自己への信頼		他者への不信		他者への信頼		
		Q27	Q28	Q30	Q31	Q33	Q34	Q38	Q32	Q37	Q41	Q39	Q40	Q35	Q42	Q36	Q29
対処の仕方	第1因子 内面的思いや感じと巻きぞえ的行動	Q11	*			**	**										
		Q12	**				**	**	*				— *		*		
		Q13	**				**	**	*					*	*		
		Q15	*	**			*	**	**					*	*		
		Q16	*	**			**	**	*				— **	**			
		Q17		**	*		**	**	**				— **	**	*		
		Q18		**			**	**	**						**		
		Q19		*			**								**	*	
		Q20		**			**								*	*	
		Q21		*				*							*		
		Q22		*				*	*	*				— *	*	*	
		Q23		**			*	**	*					— *		*	— *
		第2因子 楽観的とらえ	Q14								*	**					
Q24											*			— *			
第3因子 回避行動	Q25					**	*							*	*		
	Q26		*			**	**					— *		*	— *		

#### IV. 考察

今回の研究の結果から、今までの育ちの中で、両親の不和を多く経験した者は、青年期になっても、対人関係の困難性を中心とした内向性問題を抱え、また他者への不信感、自己への信頼感の無さを、感じているという事が明らかになった。これは、Jenkins, J.M.<sup>9)</sup> らや、Fergusson, D.M.<sup>10)</sup> らの研究が、攻撃行動や、触法行動など外向性問題と関係があるという結果とは異なるものである。それは前述した様に、先行研究の対象年齢が、せいぜい13歳までなのに対して、今回は18～19歳の青年であり、しかも触法行為を起こしにくい女性が対象であるという事で、質問項目として最初から外した為である。ただその代わりに対人関係など内向性問題に関係があったという事は、今まであまり明らかにされていなかった。青年後期という時期にまで、女性に限っては、内向性問題で、両親の不和が影響しているという事が明らかになった。この事は、某女子学生のみでなく、多くの青年期の者が、不安視している対人関係を中心とした内向性問題を生じさせる原因が、両親をはじめとする家族にあったということである。両親の不和は、親が安全基地の役割を取る事を困難にし、子どもは心理的に危険な状態の時に癒される事が無い。こんな時危険を与える可能性のある他者に対して、安心して交わる事が出来ないし、いつも不安感を持って接していたのであろう。これが対人関係の困難性であるし、他者への不信感、自己への信頼の無さを感じさせる事になったのだと思われる。

次に、今回の研究の焦点の1つである、両親の争いの時の、対応の方策の違いが、アダプテーションにどう影響してくるかという事である。Davies, P.T.<sup>11)</sup> らのは、子どもが情動的安全を保つ為、5つの思いや感じ、2つの行動の計7つの因子からなる方策を考えているが、その影響までみていない。今回は、7つの因子を考えて項目を設定したが、因子分析の結果、3つの因子しか見出せなかった。そして、第1因子の両親が不和の状態の内面的思いや感じで困惑し、巻きぞえ的行動を起こしたり、第3因子の回避行動を起こした者は、対人関係で多くの困難性を抱えるなどの内向性問題を持っている。また、他者への不信感、自己への信頼の無さを感じているなどが明らかになった。一方、第2因子の両親が不和の状況であっても、楽観的などえが出来る者は、将来への明るい展望を持ち、アダプテーションにおいて問題を呈していなかった。すなわち、どの様な行動を起こして、情動的安全を保つかというより、両親の不和の状況を、どの様に認知したかが、心の傷の程度と関係し、その後のアダプテーションに影響する事が明らかになった。

24

#### V. まとめ

両親の不和など、家庭内の問題が、青年期の女性に、どの様な影響を及ぼすかを見た。その為某女子大学生216名を対象に、家庭環境全体を問うた「環境の内容」、両親



の争いの時の子どもの対し方を問うた「対処の仕方」、学生の現在の適応状況を問うた「アダプテーション」の42項目からなるアンケート調査を実施し、以下の事が明らかになった。

1. 環境の内容の10の質問項目から、第1因子「家族内の対立、不仲」第2因子「両親が忙しい」、第3因子「経済的苦労」第4因子「転居が多い」が見出された。
2. 対処の仕方の16の質問項目から、第1因子「内面的思いや感じ、巻きぞえ的行動」第2因子「楽観的とらえ」、第3因子「回避行動」が見出された。
3. アダプテーションの16の質問項目から、第1因子「内面性問題と他者への不信」、第2因子「将来への明るさ」、第3因子「自己への信頼」、第4因子「他者への不信」、第5因子「他者への信頼」が見出された。
4. 「環境の内容」と「アダプテーション」の関連をみると、それまで育った家庭内の環境が、家族内の対立、不仲があったり、両親がいそがしかったり、経済的に苦労したりといった、子どもにとって不安などマイナス要因が多い場合、その子どもが女子大生という青年期になっても、対人関係など内向性問題を持っていたり、将来への明るい見通しも持てず、他者への不信感、自己への信頼感の無さを持ち続ける事が、明らかになった。
5. 「対処の仕方」と「アダプテーション」の関連をみると、それまで育った家庭での両親が不和の状況の時、内面的思いや感じで困惑し、巻きぞえ的行動を起こしたり、回避行動を起こした者は、対人関係で多くの困難性を抱えるなどの内向性問題を持っていた。また他者への不信感、自己への信頼の無さを持っていた。一方、楽観的なとらえが出来た者は、将来への明るい展望を持ち、アダプテーションにおいて問題を呈していなかった。情動的安全を保つか、保たないかは、両親の不和を、どう認知するかにかかっているという事が出来た。

## 文献

- 1) 萩原英敏「児童の精神・心理の病とその背因」『淑徳短期大学研究紀要』第33号, 1994, p.169-190.
- 2) 萩原英敏「児童の精神・心理の病とその背因—その2. 登校拒否児とその原因—」『淑徳短期大学研究紀要』第36号, 1997, p.101-118.
- 3) 萩原英敏「女子学生の心理的危機と、それをもたらした養育環境について—その1. 女子学生の心理的危機と、養育環境の実態—」『淑徳短期大学研究紀要』第38号, 1999, p.121-144.
- 4) 萩原英敏「女子学生の心理的危機と、それをもたらした養育環境について—その2. 女子学生の心理的危機と、養育環境の関係—」『淑徳短期大学研究紀要』第39号, 2000, p.53-81.

- 5) 萩原英敏「女子学生の心理的危機と、それをもたらした養育環境について—その3. 女子学生の心理的危機と、小学生時代の自己充実感・自己達成感との関係について—」『淑徳短期大学研究紀要』第40号, 2001, p.41-72.
- 6) 天貝由美子「高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」『教育心理学研究』43,1995, p.145-155.
- 7) 長尾博「青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み」『教育心理学研究』37,1989, p.71-77.
- 8) Schaffer,H.R. 無藤隆, 佐藤恵里子訳『子どもの養育に心理学がいえること—発達と家庭環境—』新曜社, 2001, p.146-158.
- 9) Jenkins,J.M.,Smith,M.A. “Factors protecting children living in diharmonious homes: maternal reports” J. of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry Vol.29,1990,p.60-69.
- 10) Fergusson,D,M.,Lynskey,M.T. “Adolescent resiliency to family adversity” J. of Child Psychology and Psychiatry Vol.37,1996,p.281-291.
- 11) Davies,P.T.,et al “Assessing Children's Emotional Security in the Interparental Relationship:The Security in the Interparental Subsystem Scales” Child Development Vol.73,2002,p.544-562.

(資料 1)

人間形成に関わる家庭環境について

人間の育ちの中で、家庭環境がどの様であったかが、人間形成に大きく影響する事は、先行研究でも一貫して明らかにされている。そこでここでは、その環境の内容、対処の仕方、その影響度を調べる事にした。

ただ、この種の調査にたいしては、質問項目設定に当たり、プライバシーに関わる質問も多く、質問していか迷ったが、無記名で誰と特定出来ない様にする、資料の秘密を厳守するの2点を、当方が約束する事で、回答してもらう事にした。以上調査の主旨を理解してもらい、協力願えればと思う。

著 者

I. 環境の内容

以下は、家族全体や夫婦関係、親子関係などに関する質問です。自分の家庭環境に、該当する所に丸印を付けてください。

	いつも	ときどき	どちらとも いえない	あまりない	ぜんぜん ない
Q 1. 他の異性関係で、夫婦仲が悪かった	----- ----- ----- ----- -----				
Q 2. 転居が多く、周囲になじむのに苦労した	----- ----- ----- ----- -----				
Q 3. 経済的に苦労した	----- ----- ----- ----- -----				
Q 4. 父親がこどもの面倒を見ようとしないので、母親が不満となり、口論する事が多かった	----- ----- ----- ----- -----				
Q 5. 母親がこどもの面倒を見ようとしないので、父親が不満となり、口論する事が多かった	----- ----- ----- ----- -----				
Q 6. 片方の祖父母が、子どもに口出する事が多く、しつけ方で対立する事が多かった	----- ----- ----- ----- -----				
Q 7. 片方の祖父母が、子どもの自立を急ぐ事が多く、しつけ方で対立する事が多かった	----- ----- ----- ----- -----				
Q 8. こどもから見て、両親はどうでもいい事は沢山してくれたが、肝心な事はしてもらわなかった気がする	----- ----- ----- ----- -----				
Q 9. こどもから見て、父親はあまりにも忙しそうだった	----- ----- ----- ----- -----				
Q 10. こどもから見て、母親はあまりにも忙しそうだった	----- ----- ----- ----- -----				

II. 対処の仕方

あなたは今までの生活の中で、両親が仲たがいをした時、どの様に思い、感じ、また行為に出ましたか、該当する回答に丸印を付けてください。

- |  | いつも                           | ときどき | どちらとも<br>いえない | あまりない | ぜんぜん<br>ない |
|--|-------------------------------|------|---------------|-------|------------|
| Q11. 両親はそれでも、お互いを愛しているかどうか、<br>知りたいと思いましたか？                  | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q12. 両親が別居あるいは離婚するか、知りたいと思<br>いましたか？                         | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q13. 両親が次に何をしようとしているのか、心配で<br>したか？                           | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q14. 家族はそれでも、うまくやっているとと思い<br>ましたか？                           | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q15. この時、自分が両親から責められている様に、<br>感じましたか？                        | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q16. これは、自分に責任があると、感じましたか？                                   | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q17. この時、自分は争いのただ中にいるという、感<br>じでしたか？                         | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q18. この時、自分がどうすれば仲良くやってくれる<br>のか、わからないので、不安に感じる事がありま<br>したか？ | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q19. この時、自分は一方か両方を、慰めようとしま<br>したか？                           | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q20. この時、自分が他の事を持ち出して、両親の気<br>をまぎらわそうとしましたか？                 | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q21. この時、自分は、物事がうまくいっている様な、<br>ふりをしようとしてしましたか？               | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q22. この時、自分は、両親のために、問題を解決し<br>ようとしてしましたか？                    | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q23. この時、自分は両親から逃げようとしてしましたか？                                | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q24. この時、自分は平静を保ち、待てば事態は好転<br>するだろうと、思っていましたか？               | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q25. この時、自分は何かをしたかったが、結局何も<br>しなかったですか？                      | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |
| Q26. この時、自分がどうすべきかわからない状態で<br>したか？                           | ----- ----- ----- ----- ----- |      |               |       |            |

### III. アダプテーション

以下は、あなたの現在の状態や考えを尋ねたものです。該当する所に丸印をつけてください。

- |   | いつも | ときどき | どちらとも<br>いえない | あまりない | ぜんぜん<br>ない |
|---|-----|------|---------------|-------|------------|
| Q27. あなたは、身体の何処も痛む事がなく、元気で<br>すか？                       |     |      |               |       |            |
| Q28. あなたは、すぐ感情を傷つけられやすいですか？                             |     |      |               |       |            |
| Q29. あなたは、食欲があり、何を食べてもおいしく<br>感じますか？                    |     |      |               |       |            |
| Q30. あなたは、何かにつけ、よく心配する方ですか？                             |     |      |               |       |            |
| Q31. あなたは、怖い夢で目をさます事がよくありますか？                           |     |      |               |       |            |
| Q32. あなたは、学校生活が楽しく、結構毎日元気で、<br>登校していますか？                |     |      |               |       |            |
| Q33. あなたは。外で人から見られると、気になる方<br>ですか？                      |     |      |               |       |            |
| Q34. あなたは、他人から、仲間外れにされていると、<br>感じる事がありますか？              |     |      |               |       |            |
| Q35. あなたは、今は何でも話せても、他人は所詮全<br>く当てにならないものであると、思いますか？     |     |      |               |       |            |
| Q36. あなたは、これまで出会った人は、よくしてく<br>れたと、思いますか？                |     |      |               |       |            |
| Q37. あなたは、無理をしなくても、この先の人生でも、<br>信頼できる人に、出会えるだろうと思いますか？  |     |      |               |       |            |
| Q38. あなたは、過去に、誰かに裏切られたり、だまされ<br>たりで、他人を信じる事が、怖くなっていますか？ |     |      |               |       |            |
| Q39. あなたは、自分自身を信頼に値する人間だと、<br>思いますか？                    |     |      |               |       |            |
| Q40. あなたは、自分は自分で、決して他人にとって、<br>変わる事の出来ない存在であると、思いますか？   |     |      |               |       |            |
| Q41. あなたは、将来、必ず結婚しようと、思ってい<br>ますか？                      |     |      |               |       |            |
| Q42. あなたは、結婚生活で、かなりひどいけんかが<br>あっても、しょうがないと、思いますか？       |     |      |               |       |            |